

#### B-45) 蜘蛛膜下出血術後(亜急性期)のCPZ 髄液移行に関する検討

沖 春海・新多 寿 (黒部市民病院)  
田口 博基 (脳神経外科)

蜘蛛膜下出血術後 CPZ2g を投与し、脳室・脳槽ドレナージより採取した髄液内濃度を液クロ法にて経時的に測定した。重症度をA(清明:12例), B(傾眠・昏迷:7例), C群(昏睡:4例)に分類し, CPZ 投与を点滴(30分)と静注法との比較, 脳室と脳槽濃度を同時測定し比較した。脳室濃度は点滴法では7例中5例が0.20  $\mu\text{g/ml}$  以下を示し, 静注法では最高濃度Aが0.8, Bが1.62, Cが2.35を示した。脳室と脳槽の比較で最高濃度A(脳室0.7/脳槽5.81), B(1.73/9.63), C(1.53/15.63)と脳槽内が数倍以上高く, BとCは蛋白量に比例していた。蜘蛛膜下出血術後 CPZ の髄液移行は静注法がよく, かつ重症度と蛋白量に相関して移行がよく髄膜炎の病態に一致した。脳室と脳槽濃度には著明な差があり, 髄液移行の測定法(部位)に注意すべきである。

#### B-46) 重症化膿性髄膜炎に対する脳室灌流 療法の経験

佐藤 正憲・佐藤 光夫 (福島県立医科大学)  
浅利 潤・根本 仁 (脳神経外科)  
渡辺善一郎・児玉南海雄

5例の重症化膿性髄膜炎に対し, 抗生物質の脳室灌流療法を試みてきたので報告する。全例, 髄膜炎の診断で, 抗生物質,  $\gamma$ グロブリン製剤を大量に静脈内投与したにもかかわらず, 重篤な意識障害を伴う重症化膿性髄膜炎に進行したため, 抗生物質の脳室灌流療法に踏み切った。全例, 脳室穿刺時の髄液は膿汁で, 脳室炎を伴っていた。抗生物質は, 文献上脳室内投与が報告されており, 起炎菌の感受性が高かった, CEZ, TOB, LMOX を用いた。灌流施行後, 全例で臨床症状, 髄液所見の改善を認めた。本療法は1. 抗生物質の髄腔内有効濃度維持が可能である。2. 菌塊, 膿汁を速やかに排除できる。3. 脳圧をコントロールできる。4. 髄液を経時的に検索できる等の利点が挙げられ, 灌流液中の抗生物質の濃度, pH, 浸透圧, 出納バランス, 及び2次感染の防止に関して, 十分な注意が必要であるが, 重篤な化膿性髄膜炎に対しては積極的に試みて良い方法と考え報告する。

#### B-47) Suprascapular entrapment neuropathy の1例

板垣 晋一・黒木 亮 (山形大学)  
斉藤伸二郎・中井 昂 (脳神経外科)

症例は36才男性, 18年間自動車整備工として働いていた。昭和63年2月スキーをしていて転倒し, その翌日から左肩後面から左上腕外側にうずくような深部の痛みが出現した。その後1~2ヶ月でこの痛みは減少したが左上肢の挙上障害が出現し次第に増強してきた。昭和63年9月重い荷物を持ち上げる仕事が多くなり, 左肩後面に痛みが再燃し, 軽減せず当科に入院した。入院時, 左肩後面の深部痛, 左上肢の外転, 外旋の障害および左棘上筋, 棘下筋の著明な筋萎縮を認めた。また, これらの筋のEMGでは明らかなneurogenic changeを認めた。suprascapular entrapment neuropathyと診断し, suprascapular ligamentの切断を行った。本症の報告は少なく, その成因および臨床的特徴につき文献的考察を加え報告する。

#### B-48) 眼窩内異物の3例

佐藤 光夫・鈴木 恭一 (福島県立医科大学)  
川上 雅久・根本 仁 (脳神経外科)  
後藤 健・児玉南海雄

症例1は10ヶ月の女児。箸を持って転倒したためそれが右眼球内側から刺入され, 先端部は上眼窩裂付近まで達していた。右対光反射消失, 動眼神経麻痺がみられた。右前頭開頭にて眼窩上壁から眼窩内に到達し, 異物を摘出した。症例2は67才男性。約150m離れた所から発砲された散弾の1個が患者の左側内側から眼窩内に射入され左視束管内に達した。左視力低下と外転神経麻痺がみられた。左前頭開頭にて左視束管を開放したのち, X線透視下に異物を摘出した。症例3は1才10ヶ月の男児。ボールペンを持って転倒したため, それが左眼球結膜から入り眼窩上壁を穿通し左前頭葉内約2.5cmの深さにまで達した。左前頭開頭にて異物を摘出した。これら3症例をもとに眼窩内異物の治療上の問題点について文献的考察を加え報告する。

#### B-49) Diffuse Axonal Injury の画像診断

##### — CT と MRI の比較検討—

大西 寛明・東 壮太郎 (金沢大学)  
正印 克夫・橋本 正明 (脳神経外科)  
伊藤 治英・山下 純宏

重症頭部外傷のうち, 臨床上 diffuse axonal injury (DAI) と判定した症例について, CT と MRI 所見を比較検討した。急性期の CT では27例中, 中脳出血6